

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	富田 賢
主 論 文 題 目 :				
企業間アライアンスの相互補完数理モデルの提案と応用				
(内容の要旨)				
<p>経営学におけるアライアンス研究では、これまで、企業間アライアンスのマッチング段階での成立メカニズムを表現する数理モデルが存在しなかった。そのため、2社間のアライアンスの関係性を数値として把握することができなかった。本研究では、資源ベース理論 (Resource Based View、RBV) を基本フレームワークとしつつ、フローの概念やギブ・アンド・テイクの考え方を組み合わせ、サイバー・インフォマティクス (CI) 分野の数学のモデル化の手法を用いて、世界初となる数理モデルの構築を行った。</p> <p>提案する相互補完モデルでは、A社の弱みをB社の強みで補い、B社の弱みをA社の強みで補うと考え、企業間の強みと弱みの相互補完関係が強い時に、アライアンスは成立すると考える。これは、フロー・インテンシティ (Flow Intensity) が強く、かつ、フロー・バランス (Flow Balance) が保たれている時にアライアンスは成立しやすいとも説明できる。</p> <p>本研究では、営業力や技術力、生産力などの主として経営資源を代表する特徴ごとの評点付けを、1次元行列と2極のベクトルで数学表現し、2社の組み合わせを2次元マップの上で示し、そして、最大の相互補完関係の点からの距離で相互補完強度を数学的に表現することとした。</p> <p>提案するモデルは、Python言語で実装し、筆者の152社のコンサルティング先企業の実データを用いて、相互補完強度係数を算出した。アライアンスが成立した組み合わせと不成立となった組み合わせの係数の比較から、当モデルの正当性を確認した。</p> <p>加えて、相互補完モデルを発展させ、営業エリアが異なる企業間のアライアンスについては加算モデルとして追加した。また、各企業の意欲の度合いについては相乗モデルとして追加した。それらについても、Python言語で実装し、係数を算出し、同じく、平均、中央値、最頻値などでの比較検討を行い、モデルの正当性を確認した。</p> <p>企業間アライアンスの成立のメカニズムを説明する数理モデルを提案し、2社間のアライアンス成立の関係性を数値として演算可能 (コンピューティショナル) にしたことが本研究の成果である。他方では、CI分野の手法のアプリケーション分野を、アライアンス研究に拡大することにも寄与した。</p> <p>提案するモデルは、フレキシブルなものであり、ユーザーは、パラメーター数や評点付け、重み付けなどを自由に変えられ様々な企業データで試してみることができる。さらには提案するモデルは、企業間だけでなく、チーム構築や結婚のマッチングなどの人と人との関係や国と国との間のアライアンスにも応用でき、発展可能性がある。</p>				
キーワード : 企業間アライアンス、数理モデル、マッチング・モデル、資源ベース理論、相互補完関係、Python 言語				